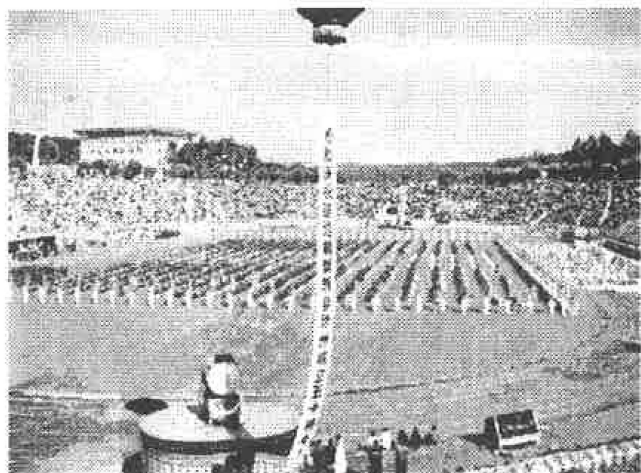


## 延辺朝鮮族自治州を歩いて 山田和生



50周年祭典の盛大なマスゲーム

昨年(2002年)の9月3日は中国延辺朝鮮族自治州が成立して50周年の記念の日であった。これを祝して州都延吉では盛大な式典が催された。この式典への参加を目的にしたツアーに添乗員として同行し現地を訪れた。ツアータイトルは「聖公会生野センター10周年記念 延辺朝鮮族自治州50周年の祭典へ」。生野センターの呉光現さんが中心となって呼びかけ、現地延吉には、生野センターで朝鮮語の先生をしている呉さんの友人が我々を待ち受けていた。呉さんの友人は延吉出身の朝鮮族であり、日本に留学している。延吉の大学で日本語教員の経験を持つ彼は、夏の里帰りで延吉に戻っていた。この機会を生かして我々が現地を訪れようという計画である。

**耳を疑う「徴用」事件**

ツアーの出発日を2週間後に控えた8月18日、準備に忙しいマイチケットのオフィスに現地手配を担当している中国国際旅行社よりメールが届いた。宿泊、バス等の旅遊手段が省政府の管理下に置かれたというのだ。さすがに、このニュースがなにを意味しているのか、にわかには理解できず、確認のための交信を繰り返したところ送られてきた中国語のFAXには「徴用」の文字が踊っている。

この団のために準備していた、延吉の数少ない五つ星ホテルである白山大厦と、延吉周辺や、白頭山など滞在期間中の足となるはずであったバスが省政府の管理下におかれ、省政府が招待する客のために徴用されたとい

うのである。徴用となると、それまでの民間の契約は、白紙撤回され、なかったことになってしまう。

22年営業してきた、株式会社マイチケットの経験でも、このような事態は前代未聞。ツアーを中止するか決行するかの判断のためには、まず情報を集めなくてはならない。しかし、省政府の決定の詳細は発表されず、現地の旅行社も、現地にいる呉さんの友人も事態を把握することはできない。

「泊まりさえできればどんなホテルでもよい。徴用の対象となっていない延吉周辺の町を探してほしい。走りさえすれば、クッションが悪くてお尻が痛くなるようなバスでもかまわない。日頃路線バスとして使われているバスも探してほしい。」こんな苦しい提案を送ってみたが、現地から満足な答えも来ない。それでも参加者には事態の経過の報告と参加意志の確認をせざるを得ない。込み入った長い説明の電話を繰り返して申込者に参加意志を確認したところ、22人が参加するという。「このまま中止すれば、延辺の朝鮮族への悪い印象しか残りません。8月31日の出発の日には、どのような条件でも関西空港に集合しますから、実現に向けてがんばってください」と励ます人までいる。

「現地の友人を信頼して断固実行する。」呉さんが下したこの時の決断が、延吉の中国国際旅行社や、現地の友人が、動きやすい条件を生み出したようだ。同様の影響を受けた外国からの旅行者は1000名に及んでいる。徴用の事態を前にして、躊躇した人々はことごとく旅行の中止に追い込まれていた。幸い、我々は出発の直前に、他の五つ星のホテル確保に成功し、乗り心地のよいバスも準備できた。

省による徴用の指示が書かれた文書や、その内容を報じた新聞記事を手に入れようとしたが、省の決定は口頭によって連絡されただけで、証拠となる記録はどこにも残っていない。中国は社会の成り立ちと原理が日本とは異なるという事実を如実に見せつけられた一件であった。

### 朝鮮族の人口減少

中国の少数民族の中で、朝鮮族は教育レベルの高さを誇り理想的な自治州を建設した

言われているが、次の世代を担う若い優秀な人材が、この地に根付こうとしない傾向が自治州の未来に影を落としている。

延吉で日本語を学ぶ学生が、卒業後も延吉に残るのは、大学で教員の職につく場合などに限られている。優秀な学生は北京、上海や瀋陽など発展の著しい大都会での就職を希望する。海外に留学する学生も多い。このような背景があるため、旅行社のガイドの日本語レベルはお世辞にも上等とは言えない。我々は、瀋陽からもう一人の優秀なガイドが同行させ、さらに大学で日本語を教える教員にお手伝いをいただいたために、なんとか事なきを得た。

漢民族と、朝鮮族のカップルの間に生まれた子どもはどちらの民族を選ぶこともできるが、少数民族に対する優遇政策の魅力から朝鮮族を選ぶ人が多い。中国の一人っ子政策の中で、少数民族はその政策の適用を免れている。また、進学の際の優遇政策もとられている。それでも、州の人口は減少し自治州としての条件を満たすことが難しくなっている。

圧倒的な人口を持つ漢民族から受ける社会的、経済的な影響力は、周辺少数民族の若者を飲み込んでしまう。

#### 北朝鮮からの越境

北朝鮮との国境の町、図門を流れる豆満江のほとりに立つと、あまりにも川幅が狭いことに驚く。橋の向こう、北朝鮮側は石を投げれば届くかと思うほどの距離であり、その向こうに、煙突から煙の上がる民家や、木の生えていない山並を望むことができる。

金日成のバルチザンの舞台としても有名な白頭山は、その山頂にある天池に水をたたえた景勝の地である。広大な風景の向こうに広がる北朝鮮との国境も、人の行き来を妨げることなどできそうもない。

現地旅行社のスタッフの話によると、北朝鮮から中国側へ国境を越えた人々が、漁船などに紛れて韓国に入るルートの話はよく耳にするとのこと。いずれの越境も今は違法ではあるが、将来、朝鮮半島が統一されれば、家族は38度線を越えて再会することができる。とすれば密入国の状態は一時的なものであって、その間にわずかでも蓄えをつくることができればと考える人がいても不思議ではない。中国側の闇ルートに支払う金のある人に限られるものの、国交のある中国と韓国の交易は頻繁であり、入国管理も厳しいものではないことを思えば、かなりの数に上っているのではないだろうか。

延吉へ行くには日本からの航空便の都合で、遼寧省の省都、瀋陽の町に立ち寄ることになる。瀋陽といえば、ニュースで北朝鮮の亡命者が駆け込むシーンが繰り返され放映されて一躍有名になった日本領事館。町の中心に近い静かな官庁街も、今や瀋陽の隠れた観光名所となってしまった。とはいえ、その前を歩くことは言うまでもなく、車内からの撮影も禁止されている。ガイドの話によると、旅行者が不用意にカメラを向けたため、警備員がバスを停車させて車内に乗り込み、フィルムを抜き取った事例もあるとのこと。10メートルおきに警備員が立ち、塀の上にも、歩道の上にも鉄条網が張り巡らされ要塞と化した日本領事館。その前を日本人観光客を乗せた大型バスが徐行して通り過ぎてゆく風景が繰り返されている。

2年前に神戸学生青年センターの北朝鮮への旅行に添乗員として同行して以来、朝鮮国際旅行社とのつきあいが始まり、北朝鮮への旅行手配という日々の業務を通じて人々の暮らしを垣間見る機会が増えた。朝鮮国際旅行社のスタッフは、職務に忠実であり、慎ましく誠実な人柄の人が多い。市場や、民家を訪れることはできないという制限はあるものの、旅行する人々の希望に答えるように様々な提案をしてくれる。また、団体での旅行でなくても、一人だけの旅行の手配にも快く応じてくれる。

北朝鮮に関するイメージが悪化する報道が繰り返されている今こそ、様々な人が現地を訪れ、報道で作り上げられたイメージとは異なる、多様な北朝鮮の姿に触れることに意味があるのではないだろうか。人々の往来する道は、閉ざされてはいけないと思う。今年も企画される神戸学生青年センターの北朝鮮への旅を充実したものにしたい。



北朝鮮に接する白頭山山頂付近